

# ループリックが結ぶ教育接続(10): [書評] 大学教員のためのループリック評価入門

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/43330">http://hdl.handle.net/2297/43330</a>

# 書評・大学教員のためのルーブリック評価入門

金沢大学 大学教育開発・支援センター准教授 杉森 公一

## ルーブリックと出会う

ルーブリックを用いた教育評価は米国を起源とするが、大学教育での広く活用されるようになった背景に、外部評価への対応がある。日本国内では、中等教育段階での観点別評価あるいは絶対評価の導入を契機に取り組みが先行して進んでいるものの、大学教育での効果的な利用方法は、まだまだ実践の蓄積の途上にあるといえよう。

Stevens によれば「Introduction to Rubrics」(2002)は、米国で大学教育を対象としたテキストとして普及しており、その第二版となる「Introduction to Rubrics 2nd edition」(2013)の邦訳が、佐藤浩章らの手によってなされた。『大学教員のためのルーブリック評価入門』(二〇一四)は、国内での実践の駆動力となる価値の高い著作である。筆者自身は、中教審質的転換答申がまとめられつつあった二〇一一年以降の各地での学会・研究会、佐藤浩章による北陸学院大学F

ろう。授業目標や授業課題の到達度を明らかにして、学生とともに授業の目標を共有することに、新しい意味を見出すことができるようになる。

第II部・ルーブリックの作成と様々な状況での使い方では、「学生と作成するルーブリック」「教職員と作成するルーブリック」「ルーブリックを使った採点」を「ルーブリックのカスタマイズ」が残され、分野別ルーブリックに言及した「主題による変化(原題: Variations on the theme)」に代わって六章が追加された。「ルーブリックのカスタマイズ」「体験学習のためのルーブリック」「ルーブリックとオンライン学習」「ルーブリックと授業改善」「自己評価とキャリア開発のためのルーブリック」「ルーブリックとプログラム評価」さらに「終章・ルーブリック・マニフェスト」で構成される。

第七章の既製ルーブリックを利用したルーブリックの改善方法、第八章の様々な事例・状況・対象への応用は、本連載で紹介してきたようなケースに光をあてる。特に、地域社会でのサービス・ラーニング、キャリア教育、インターンシップや実習教育のような体験学習のルーブリックに一章を費やしており、体験そのものの満足度を超えて「振り返り」を促進するために有効な手立てを与えてくれる。eラーニングを組み合わせたことが多くなる状況に合わせて第九章のオンライン学習が参考になる。第十章・第十一章からは授業改善や教育・研究能力向上のための教育ポートフォリオ、教師自身の自己能力開発まで視野を広

D 研修会、AAC&U副会長のF. Roadsによる大学教育学会主催ルーブリックワークショップへの参加を通して、その可能性について体感するとともにStevensらのテキストを手に、自身の授業や研修会の場での試行を始めた。本稿では、佐藤らの邦訳をもとに第一版および第二版の書評、教育接続へ与えるインパクトについて私見を述べたい。

## 大学教員のためのルーブリック評価入門

第一版と第二版に共通する最初の六章は、第I部と第II部の前半にまとめられている。第I部・ルーブリック入門では、「ルーブリックの基礎」「ルーブリックを使う理由」「ルーブリックの作成法」までを扱う。本連載でも扱ってきた事例でも、基本的なルーブリックの作成を足掛かりにして、まず一年目の試行を終えた教育機関が多いのではないだろうか。最初の三章をもとに作り方を学び、まずは使ってみることをおすすめする。

ただし、なぜルーブリックを使うのか、授

## 授業に内包された教育接続、教師内・授業内・機関内教育接続

このように第一版と第二版の大きな違いは、追加の六章にある。既製ルーブリックを利用するという視点については、導入のハードルを容易にするものであり、VALUEルーブリックなど共通に使えるリソースも増えてきている。本書の監訳者である佐藤浩章は、学内の教員で作成したルーブリックを共有し、互いに研鑽するためのルーブリック・バンクをつくることを推奨している。さらに、日本高等教育開発協会のウェブサイトに全国版のルーブリック・バンクを開設しており、作成したルーブリックを送信することでアクセスが可能である。詳細は、同協会 <http://jaed.jp/jaedweb/> を参照いただきたい。

第十二章には、大学教職員の資質・能力開発(ファカルティ・ディベロップメント)に関連した章立てが続いているが、個々の教師の教育開発を超えて、大学の提供する教育プログラムやカリキュラムの開発へも大きなルーブリックが描かれる。図に示すようなルーブリックの入れ子構造が示すものは、むしろ教師または学習者自身に、授業の中に、大学機関の提供するカリキュラムの節々にある、教育接続の谷間ではないだろうか。ルーブリックが気付かせてくれる、日々の授業で何を、何を身につけようとするのかの自覚こそが、高校と社会を結び付ける大学教育の未来を、たちづくる原動力となるのである。



業デザインの中にどう位置づけられるのか、そもそも教育評価・学習評価に必要なものなのかは、少し情報を加えて整理したい。佐藤浩章らの『大学教員のための授業方法とデザイン』(二〇一〇)を実践の拠り所において、理論づけのために松下佳代ら『新しい能力は教育を変えるか』(二〇一〇)、松下佳代『パフォーマンス評価』(二〇〇七)、ダイアン・ハート『パフォーマンス評価入門』(二〇一二)を参照したい。教師の期待する目標を、いかにして学生の学習成果に結び付けるのかの、巨視的な枠組みを授業設計に対応させること。また、教育内容をいかにして伝える、学習者の能力開発につなげるのかを、学生自身に問いかけ、教師と学生が相互に評価をつくりあげていくこと。練られた授業設計の上に、評価自体が学びのプロセスの一部をなすことが見えてくる。

本書にもどって、第I部を読み終えたならば、ルーブリックは決して「固い」、変化を許さないようなものではないことが分かるだ

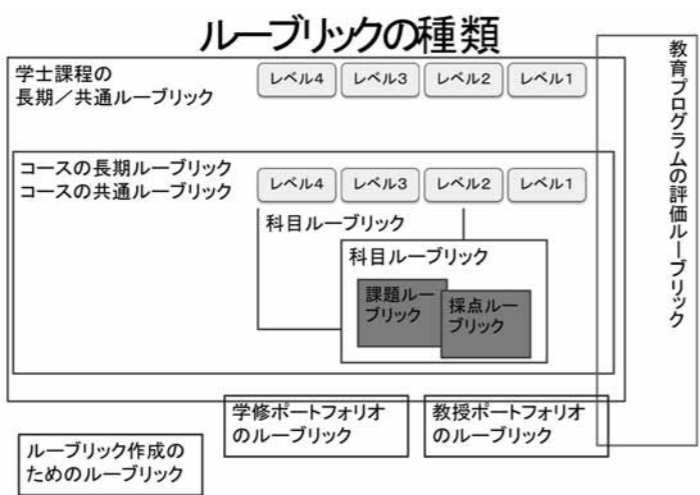


図 ルーブリックの入れ子構造と様々な段階でのルーブリック

参考文献  
D. Stevens and A. Levi (2005) "Introduction to Rubrics" Stylus.  
D. Stevens and A. Levi (2013) "Introduction to Rubrics" Stylus, 2nd edition.  
佐藤浩章 監訳(二〇一四)『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部  
佐藤浩章 編(二〇一〇)『大学教員のための授業方法とデザイン』玉川大学出版部、三七五〇頁(第四章: 学生の成績評価)  
松下佳代 編(二〇一〇)『新しい能力は教育を変えるか』ミネルヴァ書房、二二八―二八〇頁(第七章、第八章)  
松下佳代(二〇〇七)『パフォーマンス評価』ぎょうせい  
ダイアン・ハート、田中耕治 監訳(二〇一二)『パフォーマンス評価入門』ミネルヴァ書房